

形を探ろうとした松本博士以下の成立論の展開が紹介されている。

「一乗思想解釈の展開」（中村瑞隆）は、一乗經典の代表である法華經自体に、一乗・三乗についての明瞭な理論的説明がないことから、法華經に対する三一権実・三車四車等の諸種の異解が生じたとして、天台・嘉祥・慈恩・賢首の三・四車論についてその問題点を指摘し、更に近代の松本文三郎・木村泰賢・吉田龍英・布施浩岳・鈴木宗忠等諸氏の三・四車論を検討して、そこから法華經の原思想を探ろうとしたものである。

「授記思想解釈の諸類型」（田賀龍彦）は、法華經述門の主要思想であり、その相当部分を占める二乗授記に対して、どのような解釈がなされているかを、印度の支那・日本と三國に亘る法華教學史の流れにおいて論究し、その意義の変遷を跡づける。

以上、第三篇所収の諸論文は、法華經に関する種々の問題について、近代仏教學の成果に立って論究したものであり、また相互に関連した問題を扱っているものもあり、現在の学界の水準を知るにも一読すべきであろう。そして、ここに注記、附記されている豊富な文献資料は多くの研究者を利するであろうし大いに活用されるべきである。

（平樂寺書店刊）

小松邦彰

近代日本の宗教と政治

中 濃 教 篤 著

現宗研の顧問である中濃教篤師が『近代日本の宗教と政治』を世に出された。本書は宗教と政治及び教育の問題、戦争と平和の問題を座標軸にして、近代宗教史の歩みをまとめたものである。前近代の宗教史に比較して、近代のそれ（特に仏教史）は最近研究が一段と進んだとはいえ、その成果はまだ不十分であり、種々な角度から考察を加え、深めねばならない現状にあるといえる。しかも、近代宗教史研究は、単に研究をまとめるだけでなく、そこには宗教の未来への展望と現状批判に根ざす問題視角が設定されねばならず、いきおい現時的、実践的な視野が要請されてくる。そこではまた、従来の護教的宗派内の考察の範囲を越えて、広く社会構成体のモメントとして宗教を位置づけ、歴史の視野に宗教を投影させて、宗教の現時的諸形態を再

把握させることが不可欠となるのである。

中濃師は、宗内のみならず広くこの分野の研究者として知られるが、本書は長年にわたる研究業績の集大成といふことができる。しかし本書は、「軍国主義復活の風潮が、宗教界にもひしひしと感ぜられることに心を痛め、あえて本書を世に出すことを決意した」と述べられているように靖国神社国営化の動きを始めとする国家神道の復活、軍国主義化という現実的問題意識にもとづく実践のための書となっている。これに基づいて、国家神道を権力と関連して多角的に把握、明治以降の国家主義、フアシズム思想と宗教、国家権力の帝国主義政策、植民地政策に奉仕した布教伝道の実態を考察している。本書は三部に分かれ、①ナシヨナリズムと宗教、②植民地支配と宗教、③宗教の政治利用と平和運動を、豊富な資料と冷徹な史観で分析されている。①では、仏立講の特質、明治から大正、昭和期に至る宗教と国家主義との結びつき、および創価学会、公明党のイデオロギーについて論じ、②においては中国、朝鮮に対する日本帝国主義の植民地支配と結びついた仏教、キリスト教、天理教を問題にし、特にこの状況の下での国家神道の形態を詳細に分析する。③の項目は、戦後宗教史を仏教界を中心にとまとめたもので、特にこの中の教団革新、民

主化運動及び仏教徒の平和運動等の問題を明らかにしている。本書は、種々な資料を駆使して構築された実践近代宗教史であるが、今まで不十分であった新しい史実を数多く掘り起され、権力に対置した宗教の歴史的動向を探っている点に特色を持っており、戦争責任の追求と反省、宗教の現実と未来への展望を打ち出していることと共に深められるべき視点である。ここでは紙数の都合もあり、また全般的にふれる力を持合せていないので、以下特に注目される点をあげておきたい。

第一部「ナシヨナリズムと宗教」は、日蓮系の動向を中心にまとめられている。幕末の日蓮系民衆宗教として仏立講については、著者は先きに本誌(No.2)に掲載しているが、本書では仏立講の民衆性を指摘しつつも、長松清風の折伏主義が権力へ妥協し、やがて中国侵略に協力を誓った「満洲」開拓伝道を論ずる。また田中智学における天皇人格化、国体的な法華経解釈と、侵略との関係を指摘し、さらに日蓮宗を含む仏教々団が、思想善導、危険思想撲滅を説き、惟神仏教へと変貌をとげる姿を扱っている。戦前と戦後における日本山妙法寺の侵略から平和への転換における記述は鋭く、特に批判点は従来の書にみられないものである。日蓮宗についてはいく分の配慮もあってか、大師号

勅額下賜を中心にふれられている。著者が「大衆との関係でこれを解決する方向ではなく、またしても権力への屈従による救済を求めて行った」という点は近代仏教史の性格を示すものであるが、こうしたお上かみに弱い仏教の特質はどこに基因するのか、そこには著者も指摘する如く、絶対主義天皇制権力の重みや仏教が民衆性を放棄した点にあるにせよ、近代においては、労働運動や社会運動が活発化し、反体制の意識的活動が展開する中で、ことさら仏教団体がこの「撲滅」をかってでたのは一体どうしてなのか、これらの「土下座仏教」とでもいうべき事実を普遍反動性と規定しているがこれだけで処理できぬ要素がひそんでいるのではあるまいか、と思う。しかしそれは同時に本書に見られる日蓮系の近代における汚辱の歴史と戦争責任を反省し信仰の歪曲を徹底的に否定する立場から直視せねばならない点でもある。創価学会への批判もこの点をふまえ、その論理構造を説明していくべきことを著者は示していると考えられる。

第二部「植民地支配と宗教」は、従来の書にみられぬ視野に立って、中国・朝鮮への伝道が日本軍国主義の植民地政策に結局はそうものであったことを明らかにしている。また「満洲」や朝鮮各地に神社を建立し、他民族に国家神

道を強請させた日本帝国「独特の方法」「国家神道の恐るべき罪悪」を指摘する。この点は「国民精神総動員」復活の動きがみられてきた今日だけに、強い説得力を持っている。宗教が信仰を権力に奪われ売り渡すことが民衆の魂、宗教の真精神をいかに抹殺してしまうかという例証でもある。単なる布教伝道では、所詮権力の土俵の中で利用されてしまうのであり、客観的には「神々の侵略」を意味する（主観的には弘布をめざしても）ことを教えている。近代における布教の基本的姿勢の確立が要望されているが、本書の示す事実を無視した所でそれを考えたならば再び誤りを犯すことになろう。「歴史の真実」「歴史の必然」への直視と反省を著者は説いている。

第三部「宗教の政治利用と平和運動」は、今日における宗教者の任務を中心に論述されている。著者の結論ともいう言葉を先にあげれば「日本仏教が真に民衆のなかに身をおき、日本の独立と世界平和確立のために貢献し、軍国主義復活に反対して民主日本の樹立に積極的な姿勢をしめすかしめさないかが、その前途を決定するということである」「ここでは宗教団体への弾圧と統制を分析し、宗教法人法改定は憲法改悪の動きの一環であり、戦前の「右手に宗教団合法、左手に治安維持法」の再現であると指摘する。信

教の自由問題は、自由抑圧の戦前こそ意識されるべきものであったが、全般的に仏教団体はこの問題を権力にすることがよって保障してもらふ姿勢をとった。結局この「土下座性」は信仰自体を歪曲する道であったことを肝に銘じておかねばなるまい。信教の自由を守り、平和を護る闘いが共通の基盤に立っていることを著者は指摘する。

近代仏教の「百年河清」はいつか。仏教革新運動や教団民主化運動、及び平和運動に至るまでの動向を考察しているが、この点は妹尾義郎氏とも親しく接し、また運動にも参画してきた著者ならではの指摘がしばしばみられる。

特に教団民主化運動挫折の要因を、米占領軍の植民地支配体制の基本方向がつかめず、表面的な民主化政策に甘い幻想を抱いていたこと、教団民主化は役職のポストを握ることによって出来るものではない。教団の経済的基盤への理解の不足、民主化活動と平和運動と関連させ、仏教利用政策へ対決しなかったこと、「絶対主義天皇制のもとでその侵略イデオロギーに毒された仏教理論に容赦のないメスがふるえずにしまった」こと、寺院形態と教団のあり方への具体的方向づけの不足、等に求めているのは示唆的である。ただ、教団民主化運動や妹尾氏の実践及び仏教徒平和運動を前掲の目的に沿って、どのように相互に関連づけて

いくべきなのか、著者が教団民主化と平和運動をいかに結合させて展開すべきだと考えているのかの高説を聞きたい所である。また著者の批判する仏教徒のうちにある、「あれもこれも」性、ウヤマや中道論、社会認識の不充分さは信仰の主体性を維持するためにも大切な批判であろう。

教義的側面を近代の歴史状況下で明確にし、また教義の歪曲修正が如何に教えの真精神と教団の歴史的任務をねじ曲げ権力に追随利用されることになったか、という思想的側面について今後稿を改めてまとめられるようお願いしたい。わが教団の各聖も本書の内容を直視され、教団の民主化と再生への指標となさるようお奨めしたい。著者の意図を充分理解できず勝手な意見を述べてしまったが、ご寛恕願いたい。(アポロン社刊)

石川 康 明

中山法華経寺史料

中 尾 堯 編著

本書は中世における中山法華経寺及びその末寺の關係資